

独占資本主義分析と宇野「帝国主義段階論」(上)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 水谷, 良夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23909

独占資本主義分析と 宇野「帝国主義段階論」(上)

水 谷 良 夫

- I 独占資本主義への移行と〈経済学の方法〉(以上 本号)
- II 独占資本主義と「金融資本」(以下 次号予定)
 - 1. 「生産の集積」と「固定資本の巨大化」
 - 2. 独占資本と「金融資本」
 - 3. いわゆる「金融資本の蓄積様式」について

今日の資本主義が占める「歴史的地位」とそのもとで現出する多面的な諸問題・矛盾の全貌を、資本主義自体の今日に至る段階的發展＝矛盾展開に関する理論的・歴史的認識の深化のなかで確定し系統的に解明しようとする際、焦眉の課題は、既に指摘したように、資本主義の独占＝帝国主義段階＝独占資本主義段階に固有の経済諸関係の構造と動態——〈独占と競争〉に規定される資本蓄積・社会的総再生産過程の重層的な編成と運動法則——をいかに正しく認識しうるか、という点にある。このためには、独占資本主義それ自体に内在する法則認識の困難性の根源を確認し、独自の理論的・歴史的基礎視角を確立することが必要かつ必然的に要請される。——前稿で提起し、以て爾後の研究の発端に据えた要点は、凡そこの点であった⁽¹⁾

本稿の課題は、同じくマルクス経済学の立場にたつとしながらも、資本主義の段階的發展・移行、とりわけここでの主題と関連する独占＝帝国主義段階把握の方法と内容において、われわれの基本認識＝基礎視角とは鋭く対立する異説＝故宇野弘藏氏が提起されたその独自の『経済学方法論』に基づく「帝国主義段階論」の基本的特徴と問題点を批判的に明らかにしておくことにある。こうした課題設定は、それ自体なお独占資本主義分析の基礎視角に係わる問題の範囲にとどまるとはいえ、資本主義の歴史的発展過程の「段階」乃至「段階論」という最も基本的かつ端緒的な概念について、我国のマルクス経済学研究者の間では依然として周知の「対立」と「混乱」が支配的な現状⁽²⁾を前にして、われわれが堅持すべき「基礎視角」に託したその含意

を明確に提示するうえで、避けることのできない検討課題といえよう。

I 独占資本主義への移行と〈経済学の方法〉

「マルクスにとっては、資本主義は発達すればする程、理論的に想定せられる純粹の資本主義社会に近似するものとして、その経済学の原理論に客観的根拠を与えることになったのであるが、しかしこの資本主義の傾向が、十九世紀末には種々なる事情によって、必ずしもそういうように一面的には展開されなくなるということが明らかになってこないと、経済学の原理論の体系的純化は決して完成しえないのであった。そしてまた十九世紀末以来の金融資本の時代が解明されないと、資本主義の発生期・発展期も、その発展段階として明確に規定されえないのであった。」⁽³⁾

「・・・原理論を可能ならしめた資本主義自身の純化の傾向をある意味で逆転する金融資本の時代の出現は、原理論に対する段階論の展開を明確に区別せざるをえなくするのである。」⁽⁴⁾

「・・・資本主義発展の段階区分は、特殊の型の資本を中心とする経済過程に対応した上部構造の変化によってむしろ明確にされることになる。経済政策の変遷はそのことを端的に示しているのであって、重商主義・自由主義・帝国主義という周知の三段階をなすのである。その下部構造を決定的に支配する資本が、商人資本・産業資本・金融資本と区別せられるのであるが、しかしここで注意しなければならないのは、商人資本から産業資本、産業資本から金融資本への発展は、資本がそれ自身に展開するものではない。資本主義的發展の諸条件の変化とともに変化してきたのである。」⁽⁵⁾

(1) 宇野弘蔵『経済学方法論』によれば、19世紀末葉以降「金融資本の時代の出現」にもなって、「経済学研究の分化」——「原理論」・「段階論」・「現状分析」とへの三「分化」——と、これら各研究領域の方法と対象の峻別・限定の必要性和必然性が生じるとされ、この点の認識を独自の方法論上の要点——「論理と歴史との照応関係」⁽⁶⁾に基づいて「歴史的過程を理論的に解明する特殊の方法」⁽⁷⁾——として強調されている。

一般に、マルクス経済学の立場にたつならば、経済学の体系的研究の窮極的目標が今日の資本主義に関する的確かつ有効な現状分析に求められることそれ自体は、宇野氏と同様、改めて多言を要しない。宇野『経済学方法論』を含めて、方法論をめぐる諸説の分岐は、従って、この現状分析における的確性と有効性を保証するためには不可欠であるとする方法的手続きとそれを支える基本的認識——資本主義の一般的特質把握および段階的変容に関する

基本的認識——の相違に直接由来するものといえよう⁽⁹⁾。われわれの場合、それは、前稿で明らかにしたように、マルクス『資本論』を基点とし、レーニン『帝国主義論』に見出されるその「継承・発展」を理論的基準とする独占資本主義論の再構成の必要性であり、宇野氏の場合には、繰り返し強調されているように、「金融資本の時代の出現」を契機とする経済学研究の「分化」——「原理論の体系的純化と段階論の必然性」⁽⁹⁾——である。

以下、差当りこの点の確認を導きの糸として、宇野「帝国主義段階論」——「段階論」の一部を構成する「帝国主義」論——の特徴を「金融資本」の「一般的規定」を中心に検討すること、これが主題となるが、それに先立って、ここでは主題の展開に必要な限りで、その『経済学方法論』の構成上の特質を概括しておく必要がある。

(2) 宇野『経済学方法論』において、その体系構成の端緒に位置する「原理論」とは、「純粹の資本主義社会」の「経済的運動法則」⁽¹⁰⁾を解明する「完結性をもった原理」⁽¹¹⁾とされている。これに対して「段階論」は、「原理論」と「現状分析」を「媒介」⁽¹²⁾するものとして、「原理論」の対象領域からは予め排除されている「資本主義自身の発生・発展・消滅の歴史的過程」——「歴史的社会的発展、転化の過程」⁽¹³⁾——の「タイプ」⁽¹⁴⁾＝類型的解明にあてられている。

宇野氏によれば、「マルクスが『資本論』の序文でいう、経済学研究の窮極目標をなす『近代社会の経済的運動法則』は、私のいわゆる原理論的に解明される運動法則と段階論的に解明される資本主義の歴史的な発展過程の運動法則とが共に含蓋されているようである。しかしこの点は、・・・資本主義の発展がそのまま純粹の資本主義社会の実現に帰一するものとなしえない吾々にとっては、同一視を許されない」⁽¹⁵⁾ということになる。

すなわち、一方では「純粹の資本主義社会」の想定とそのものでの商品経済関係の「自立的」・「永久的」・「完結的」運動の「法則」的解明＝「原理論」と、他方では資本主義の「発展、転化の過程」の「タイプ」的解明＝「段階論」とへの、マルクス『資本論』の方法論的組替＝再構成、これこそ宇野『経済学方法論』の骨子をなす「金融資本の時代の出現」を契機とする「論理と歴史との照応関係」——「純粹の資本主義社会への近似」とその「逆転」とに対応する「原理論の体系的純化と段階論の必然性」——の内容であり、「歴史的過程を理論的に解明する特殊の方法」とされるものの基本線である。

宇野『経済学方法論』のこのような構成上の特質の背後には、「資本主義」と「商品経済」とにかんする宇野氏の独自の認識が横たわっていること、この点をなお一言指摘しておかなければならない。宇野氏によれば、先ず「・・・商品経済が共同体と共同体との間に発生し、共同体の内部に渗透していつて、労働力をも商品化することによって、始めて一社会を支配する資本主義社会として確立せられ」⁽¹⁶⁾ること、そして、「・・・労働力の商品化による生産物の商品化は、人間が労働＝生産過程において実現する自然対人間の関係の内にまで商品関係を持ちこむことであって、生産物の商品化は全面的、且つ必然的なものとなる。少くともそういう傾向にあるものといつてよい。人間が自らの労働によって自然から生活資料を獲得し、その生活資料によって再生産される労働力をもって再び自然に働きかけるといつ、このあらゆる社会に共通な、人間生活に絶対的な物質代謝の過程を商品形態を通して行つというところにその社会的な歴史的な意義がある。資本主義社会を他の社会と区分する基準もここに与えられる」⁽¹⁷⁾ということになる。見られるように、われわれの観点からするならば、一言にして、「資本・賃労働」の基本対抗を基軸とする資本主義固有の経済諸関係の商品経済関係への一面化＝解消——「労働力の商品化」を基軸とする経済諸関係の「商品形態」的処理（「純化」された世界）とその「限界」（「不純な」世界）とへの「分化」＝対抗——が、これである。そして、こうした独自の認識こそ、宇野氏が強調してやまない「原理論」と「段階論」とへの経済学研究の「分化」＝再構成のうちに貫かれる基本「原理」にほかならないのである。⁽¹⁸⁾

(3) 宇野『経済学方法論』におけるこうした研究の「分化」のもとで、「資本主義の世界史的発展段階」の解明を、従つて、その一部として「金融資本に基く帝国主義の時代」の特質解明を、取扱う「段階論」は、「原理論」と「現状分析」との「中間」に位置し両者を「媒介」する「規定」とされていること、既に指摘した通りであるが、この「段階規定」もまた勝れて独自のものとなっている。いま、主題の限定との関連で、問題の所在を示せば、こうである。宇野氏の場合、資本主義発展の「段階区分」は、経済過程で支配的な「特殊の型の資本」（「商人資本」・「産業資本」・「金融資本」）に対応する「上部構造の変化」＝「経済政策の変遷」（「重商主義」・「自由主義」・「帝国主義」）を基準とし、「各段階において指導的地位にある先進資本主義国における、支配的な産業の、支配的な資本形態を中心とする資本家的商品経済の構造を、・・・世界史的に典型的なものであるとして」⁽¹⁹⁾、しかもその「経済政策」と「国際関係」との関連で、「タイプ」＝類型的に解明することをもって「段階規定」の主眼とされている。そして、資本主義の独占＝帝国主義段階は、このなかで、「金融資本」を支配的な資本の「型」⁽¹⁷⁾とする「帝国主義」（政策）の時代＝「段階」として、「爛熟期の資本主義」、——「重商主義」＝「発生期」、 「自由主義」＝「成長期」に対して——

という「歴史的地位」が与えられることとなる。⁽²⁰⁾

ところが、この宇野「段階論」は、一方では資本主義の段階的發展・移行の一般的な「法則性」⁽²¹⁾を否認することにおいて(「・・・商人資本から産業資本、産業資本から金融資本への發展は、資本がそれ自身に展開するものではない。」、また他方で資本主義の各段階の特質を「包括する」⁽²²⁾一般的・法則的認識の有効性を拒否することにおいて(各段階の「指導的」な資本主義国の「タイプ」=類型的解明)、すなわち、二様の一般的・法則的認識の峻拒というその方法において、資本主義の段階的変容の解明、とくに独占=帝国主義段階の特質解明を狙う伝統的我国マルクス経済学の従来諸説⁽²³⁾に対する異説=「挑戦」⁽²⁴⁾とされていること、これまでも指摘・批判され、われわれも既に瞥見した通りである。

宇野「帝国主義段階論」はこの「段階論」の一部を構成するものとして、方法論上、次の二点において特徴ある展開となっている。

先ず第一に、独占=帝国主義段階への移行がその必然性において確定されないという点において、——すなわち、宇野氏の場合、「金融資本」を支配的資本とする「帝国主義段階」は、それに先立つ段階——「産業資本」に基づく「自由主義段階」——それ自体の「内的な要因」⁽²⁵⁾に規定された、そこからの、必然的移行としては示されず、世界史の具体的事実をもって示されることとなる。

因に、「帝国主義は・・・イギリスの資本主義的發展におくれて發展したドイツ、アメリカ等の資本主義の世界史的過程への参加によって出現したのであって、いわばドイツの進出的役割に対してイギリスが防衛的立場に立つという、資本主義諸国の対立にその根拠をもっている」⁽²⁶⁾

第二に、独占=帝国主義段階の特質をその「一般的規定」において理論的に解明することよりもむしろその「一般的規定」を典型的に具現する特定資本主義国の「タイプ」=類型的解明に主眼が置かれることにおいて、——宇野氏の場合、「金融資本」の「一般的規定」よりはその具体的発現としての「金融資本の諸相」⁽²⁷⁾——「ドイツ金融資本」を典型とし、「イギリス金融資本の特殊性」をこれに對置する「タイプ」=類型比較——と、それに規定された「帝国主義」政策の類型差の解明が「段階規定」の基本的課題とされている。

「十九世紀末におけるドイツ並にイギリスにおける金融資本の形成による帝国主義の段

階」は、宇野氏によれば、それに先立つ段階と同様、「その時期を典型的に代表し後進諸国にその指導的影響を及ぼす先進国の資本主義としてあらわれたのである。またこの各時期を代表する資本の型も、直ちにあらゆる産業に一律にあらわれるというのではない。それぞれ資本主義の発展の時期に支配的な産業として、……特定の産業に代表されることになる。」⁽²⁹⁾

以上、宇野弘蔵『経済学方法論』において「段階論」の一部を構成する宇野「帝国主義段階論」は、その方法論上の枠組——従来、指摘・批判されてきたその特徴は、理論的には、以上明らかにしてきたように、「金融資本の時代の出現」とともに必然化されるとする経済学研究の「分化」と、それに規定される「段階論」の方法＝「二様の一般的・法則的認識の峻拒」として要約できる——の点で、われわれが主張する独占資本主義分析の基本視角——前稿で明らかにしたように、独占資本主義段階の総体認識の基軸を〈競争〉の〈独占〉への転化＝〈独占と競争〉の並存・対立・絡み合いの構造に求め、そのもとでの独占資本主義の経済諸関係＝矛盾の重層的な構造と動態を理論的・歴史的に分析する視角——とは、鋭く対立するものである。⁽²⁹⁾

(4) 本稿の主題は、しかし、宇野「帝国主義段階論」とわれわれの独占資本主義分析の基本視角との間に明瞭に見られるこうした方法論上の対立を前に、改めてこの外見上の隔絶それ自体に一般的な反省を試みることだけにあるのではない。いま、問題は、資本主義の独占＝帝国主義段階の総体把握の方法論において、宇野氏とわれわれの間には、こうした対立＝隔絶が現存することを、以上のように、先ず確認した上で、むしろその揚棄への、一見迂遠なしかし確実な一歩として、これら両者の方法論と、その根底において、表裏一体の従って相互規定的な関係にある独占＝帝国主義段階における資本主義の段階的変容に関する一般的・概括的な基本認識にまで立ち返り、その実質的な優位性——現状分析的確性と有効性を保証する上での優位性——を対比・検討しその深化をはかること、この点にこそ求められるべきではあるまいか。本稿の主題もこの点に係わる。そして、既に指摘したように、宇野氏の場合、それは、「爛熟期の資本主義」として概括される「金融資本」の「一般的規定」であり、われわれの場合には、その理論的基準としてレーニン『帝国主義論』に示されている独占＝帝国主義段階の基本認識である。⁽³⁰⁾

以下、次号で宇野「帝国主義段階論」の基底にある「金融資本」の「一般的規定」を、既に明らかにしたその方法論との相互規定関係において、しかも他面でわれわれの独占資本主義分析の基本視角との対比において、検討することにしたい。(未完)

(注)

- (1) 拙稿「独占と資本蓄積(Ⅰ)——独占資本主義分析の基本視角——」(『金沢大学経済学部論集』第2巻第1号、1981年10月)参照。
- (2) 例えば、本間要一郎氏も「・・・『段階論』と銘うって『段階』にかんする理論的一般化を否認する宇野理論は、その内容上の問題点とは別に、『段階』または『段階論』という概念について無用の混乱をもちこんだ」として、この「『段階』の理論にかんする特殊日本的な学界状況」を指摘されている。「独占資本主義の段階的特質——独占資本主義分析の方法論——」(高須賀義博編『独占資本主義論の展望』東洋経済新報社、1978年、所収6頁。)
- (3) 宇野弘蔵『経済学方法論』(東京大学出版会、1962年)37頁。
- (4) 同上、42頁。
- (5) 同上、51頁。
- (6) 同上、20頁。
- (7) 同上、62頁。
- (8) 因に、本稿の主題との関連で、戦後我国における独占=帝国主義論の方法をめぐる諸論議を「資本論」体系との関連で整理・分類したものととして、入江節次郎・星野中編著『帝国主義研究Ⅰ 帝国主義論の方法』(御茶の水書房、1973年)を参照されたい。
- (9) 宇野前掲『経済学方法論』、35頁。
- (10) それは、宇野氏によれば、「商品形態をもって一社会の全経済を処理する、純粹の資本主義社会の運動法則」(同上、42頁)であり、「資本主義自身の発生・発展・消滅の歴史的過程をも、いわばその背後に留保しつつ、・・・資本主義社会を自立的な運動をなす一社会として提示する。したがってまたそれは他の社会から発展したものととしてではなく、さらにまた他の社会に転化するものととしてでもなく、むしろ永久的に同じ運動を繰り返しつつ発展するものであるかの如くにして、その運動法則を明らかにするのである。」(同上、150頁。)
- (11) 同上、62頁。宇野氏は、「体系的に完結した認識の対象をなす資本主義社会は、いわば完全に認識しえられるものである」として、この点を「法則の科学的認識」の決定的な根拠とされている。(同上、151頁。)宇野弘蔵『経済原論』(上)・(下)(岩波書店、1950、1952年)および、同『経済原論』(岩波書店、1964年)参照。
- (12) 「一方に体系的に完結される原理論と、他方に無限に複雑なる具体的な過程を解明しようとする、したがってまた決して完結することのない現状分析と、この両者の間に入って原理を現状分析にその一般の基準として使用する場合の媒介をなすものとしての段階論の規定を要するのである。」(同上、62頁。)
- (13) 同上、150頁。
- (14) 同上、63頁。
- (15) 同上、151頁。

- (16) 同上, 40頁。
- (17) 宇野弘蔵『恐慌論』(岩波書店, 1953年), 64~65頁。
- (18) こうした「資本主義」=「商品経済」の基本認識に基づく宇野『経済学方法論』の全般の特徴を, 次の点——資本主義の「純化傾向とその歴史的限界の認識とを根拠」に「原理論」と「段階論」とを「分化」させ, 「マルクスが『資本論』で意図していた, くり返す法則性の解明と, 発生し発展し消滅していくくり返すことのない歴史的展開の同時解明を分離」させること(桜井毅『価値論争の軌跡』, 大内秀明・桜井毅・山口重克編『講座現代経済思潮 第2巻 マルクス経済学の現状と展望』東洋経済新報社, 1978年, 所収, 44頁)に求めるとするならば, これに対しては, 直ちに佐藤金三郎氏の次のような的確な批判が想起されよう。同氏は, 宇野氏が「経済学の体系化にとって帝国主義時代の出現の意義を強調した」ことを評価しつつも, 「宇野氏は, 経済学研究の三分化が帝国主義の出現とともに必然化されるという根拠として, ただ帝国主義時代の出現という事実を指摘しているにすぎない……すなわち単なる同義反復。帝国主義時代の出現というこの誰しも否定しえない事実の指摘が, ただそれだけであかかも三分化論の正当性の根拠であるかのような錯覚が生じてくるのは, 宇野氏が, 資本主義は競争的資本主義の時代から帝国主義の時代へと必然的に発展してきたという代りに, 資本主義はその自己純粋化の傾向が一定の段階以降「逆転」せざるをえなくなったとい代るレトリックによってであるにすぎない」(『「資本論」と宇野経済学』新評論, 1968年, 162頁)とその問題性を指摘されている。また, 「『資本論』の統一的な世界〔「一個の芸術の全体」(マルクス)〕を, 『原理論』と『段階論』なる異質の世界にふるいわける」宇野『経済学方法論』の「失格」については, 南克巳『「資本論」体系の発展としての「帝国主義論」』(宇佐美誠次郎・宇高基輔・島恭彦編『マルクス経済学体系Ⅲ 帝国主義論』有斐閣, 1966年, 所収)も併せ参照されたい。筆者もこうした「宇野経済学」に対する総括的批判を共有するものであるが, 今日なお相当の「宇野経済学」継承者を見出す現状を前にして, 従来の『経済学方法論』の総括的批判を内在化させ, 〈現状分析的的確性と有効性〉という観点から, そのための方法的手続きの内容にまで立入ってその問題性に批判的検討を加えておくことがなお必要であると思われる。本稿の主題設定にこめられた意図も, この点にある。
- (19) 宇野前掲『経済学方法論』, 54頁。
- (20) 宇野弘蔵『経済政策論』(弘文堂新社, 1954年)
- (21) 宇野氏は, 「資本主義の発生・発展・没落の過程も一定の法則性をもって展開される」と述べながらも, そこではこの「法則性」の内容自体よりは, むしろそれを「原理論の対象をなす, 純粋の資本主義社会の運動法則」と峻別すべきことに力点が置かれている結果, 事実上, それを否認することになっている。すなわち, 宇野氏においてこの「歴史的過程」は, 「…非商品経済的なる, あるいは非資本主義的なる経済に對する, 資本主義的経済の滲透の過程として, いわば異質的なるものに対する支配を通して実現される発展」過程=「商品経済的には多かれ少かれ不純なる歴史的過程」

であることが強調される結果、宇野氏の「法則」概念を厳密に適用するならば、それは「純粹の資本主義社会の運動法則」に限定されることとなり、事実上、「不純なる歴史的過程」である資本主義の段階的發展・移行の「法則性」を否認せざるをえなくなる、といえよう。(宇野前掲『経済学方法論』、50~51頁)。従って、資本主義の段階的發展・移行の「法則性」に関しては、「資本主義自身の単なる論理的展開からは解明せられない」とか「歴史的発展過程をもすべて論理的展開に解消することは正しい方法ではない」(宇野前掲『経済政策論』、166~167頁)という主張が前面に出てくることになる。また、この点と関連して、宇野氏が資本主義の「發展、転化」の動因を、資本主義それ自体に内在する経済諸関係=対抗に求めず、「資本主義的経済」と「非資本主義的経済」=「非商品経済」との関係=対抗——「純化」された世界と「不純な」世界との関係=対抗——に求めていることに注意。ここに、前述した「資本主義」と「商品経済」とに関する宇野氏独自の認識とそれに基づく経済学の「分化」という発想とが具体的に貫かれていること、従ってまた、「段階区分」の基準を「経済過程に対応した上部構造の変化」=「経済政策の変遷」に求める根拠もこの点にあること、を看取すべきである。

(22) 例えば、宇野氏は「金融資本の時代の商品経済的諸現象を包括するような規定は、原理の実質を失った形式的なものとならざるをえない。いわゆる価値論のない経済学となる」(宇野前掲『経済学方法論』、41頁)として、各段階の特質の一般的・法則的認識それ自体の有効性を厳しく拒否され、各段階の「指導」国の「タイプ」の検出を強調される。その根拠は、宇野氏によれば、先の段階移行の場合と同様、資本主義は「その発展の各段階では、非商品経済的な、あるいは非資本主義的な要因によって、その原理の展開が、常に多かれ少かれ阻害されている」ということになる。ここにも「法則」認識を「原理論」の「純化」された世界にのみ限定する宇野氏の方法を見出す、ここでより重要なことは、「段階論」における一般的・法則的認識の有効性を否定する際のこの根拠は、それ自体直ちに、「段階論」が「タイプ」=類型的解明とならざるをえないとする宇野氏の主張を正当化する根拠にはならない、ということである。従って、その限りでこの「タイプ」=類型的解明の正当性の根拠は何ら示されていない、というべきである。この点を併せ確認しておかなければならない。

(23) 例えば、入江・星野前掲『帝国主義研究Ⅰ 帝国主義論の方法』参照。因に、同書では、宇野「帝国主義段階論」は「段階論としての帝国主義論」として整理・分類されている。

(24) 佐藤前掲『「資本論」と宇野経済学』、162頁。

(25) 宇野前掲『経済学方法論』、52頁。

(26) 宇野前掲『経済政策論』、165頁。この背後には、次のような事実認識がある。「一国における資本主義の発生、発展の過程は、具体的には必ず国際的に商品経済の発展の程度を異にする国に対する関係を展開しつつ、展開されるのである。……決して各々の国がそれぞれ自力で資本主義の発展をなすわけではない。資本主義は、最初から世

界史的發展をなすのであるが、この世界史的發展は、いずれかの国を指導的な先進国として展開されたのである。」(宇野前掲『経済学方法論』、45頁。)ここには、既に指摘した「發展、転化」の動因に関する宇野氏の理解が具体化された事実認識として再現している、といえよう。しかし、問題は宇野氏が「段階移行の内的な必然性を否認する積極的な根拠を提示せず、こうした事実認識＝現象記述を直ちに一般命題化し、それをもって自説の論拠とされようとする点にある。注(21)を併せ参照されたい。

- (27) 宇野「段階論」がその原型において展開されているのは、周知のように、前掲『経済政策論』である。そして、同書の第三編「帝国主義」は、第一章 爛熟期の資本主義、第二章 金融資本の諸相、第三章 帝国主義の経済政策 という構成となっている。このうち、第一章は「金融資本」の「一般的規定」に相当するが、「段階規定」の結論を、「ドイツとイギリスとは同じ金融資本を基礎とする両極的發展の結果として世界大戦を惹起することとなる」(同上、203頁)という命題に求められるため、その主眼はむしろ第二・三章にある。
- (28) 宇野前掲『経済学方法論』、45頁。ここでも宇野氏は「帝国主義段階」を根底において規定する「金融資本」があらゆる資本主義国の「あらゆる産業に一樣にあらわれ……ない」という事実認識をもって直ちに一方ではその「一般的規定」の有効性を拒否し、他方では「タイプ」＝類型的解明の正当性を主張する論拠とされているようである。事実、「タイプ」＝類型的解明の根拠はこの点以外には見出しえないのである。しかし、先に指摘した段階移行の把握の場合と同様、これはあくまで事実認識＝現象記述に留まるものであって、これらいずれの理論的根拠となるものでもない。注(22)・(23)を併せ参照されたい。——以上、まとめて云うならば、資本主義の歴史的過程の総体的認識に際し、その「法則」認識の「原理論」への封込めと、他方で「段階論」における「タイプ」論と呼ばれる事実上の現象記述と、これが宇野『経済学方法論』の最大の特徴であること、この点を先ず看取しておくべきである。
- (29) ここで独占資本主義の理論的・歴史的分析という場合の「理論的」・「歴史的」という意味については、前掲拙稿を参照されたい。そこでも明らかにしておいたように、〈独占と競争〉に規定される独占資本主義段階の経済諸関係の「法則性」は〈競争〉の一元的支配のもとでの必然的諸関連＝「法則性」とは無論同一ではない。むしろここでは〈競争〉のもとでの必然的諸関連＝「法則性」の存在＝認識の一体性が分裂し、そこからの乖離が必然＝法則化することとなる。独占資本主義の総体把握の困難性の根源も、実に、この点にある。われわれの場合、その克服の道は、この乖離の傾向性を理論的に追求し、同時にその客観性を歴史・具体的な展開のなかで検証する理論的・歴史的基本視角の必要性である。しかし、宇野氏の場合には、既に見たように、「法則性」の理論的追求を専ら「原理論」(＝「純化」された世界)に限定し、「段階論」(＝「不純な」世界)においては、「段階規定」が「決して原理論から直接展開されるものではない」(同上、48頁)として「法則」認識を否定されることから直ちに事実上、現象記述の域に留まる「タイプ」＝類型的解明をもってこれに代置させるのであ

る。両者の方法論上の分岐は、まさにこの点にある。

- ③0 宇野氏において、「金融資本」は「帝国主義」(政策)の「基礎」をなすものとして、また、ドイツにおいて「典型的な発展」を示し、しかも19世紀後半、「……70年代以後の資本主義の発展を規定する新しい資本の支配形態」=「……70年代以後資本主義の世界史発展に特殊の段階を画するもの」(宇野前掲『経済政策論』, 130~131頁)として、段階固有の構造と動態における主導的契機の位置が与えられており、その独自の「一般的規定」をレーニン『帝国主義論』における基本認識と対比・検討することは可能であり、かつ必要である。なお、北原勇「『独占資本主義の理論』と宇野経済学」(『書齋の窓』, 263号, 有斐閣, 1977年5月号)、同「『独占資本主義の理論』と宇野経済学・再論(1)」(『三田学会雑誌』, 第71巻第5号, 1978年10月)、および伊藤誠「帝国主義論か独占資本主義論か——北原勇氏の宇野批判への反論——」(『書齋の窓』, 269号, 1977年11・12月号)を、同様の課題意識から出発した相互批判として、参照されたい。